



Title	中本たか子の洋モス関連の小説を読む：「歷程」、「早春」、『モスリン横丁』ほか
Author(s)	水溜, 真由美
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 167, 31(右)-61(右)
Issue Date	2022-07-19
DOI	10.14943/bfhhs.167.r31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/86534">http://hdl.handle.net/2115/86534</a>
Type	bulletin (article)
File Information	06_167_Mizutamari.pdf



[Instructions for use](#)

## 中本たか子の洋モス関連の小説を読む

——「歷程」、「早春」、「モスリン横丁」ほか

水 溜 真由美

### 一 はじめに

資本主義の形成期にあった戦前の日本においては、多くの女性が「プロレタリアート」という言葉でイメージされる工場労働に従事していた。民営工場における女性職工数は、一九二〇年末時点で八二四、三〇八人（男性は七三〇、四一九人）、一九三〇年末時点で八八七、二八一一人（男性は七九六、二八二人）。そのうち、一九二〇年末の「染織工場」の女性職工数は六九九、二七一人、一九三〇年末の「紡織工業」の女性職工数は七四〇、三八三人であった。<sup>\*1</sup>つまり、女性職工の大多数は繊維産業部門で働くいわゆる女工だった。<sup>\*2</sup>

ただし、繊維産業部門で働く女工には細井和喜蔵『女工哀史』に描かれるような悲惨で無力なイメージがつきまと

い、労働運動の担い手として見なされることは少ない。実際、戦前の日本では、男性に比べて女性の労働組合への組織率は低かった。一九二八年末の女性労働組合員総数は一二、〇一〇人、全組織労働者の八・六パーセント、全女性労働者の〇・八％にすぎない。<sup>\*3</sup>このことは、女性が家庭、職場、労働組合、さらには社会全体において圧倒的に従属的な立場に置かれていたことと深く関わる。

女性労働者の多くは立場の弱い年少・未婚の不熟練労働者であった。職場において女性労働者は、しばしば保護主義的な考えの下で、寄宿舎に入れられ自由を制限された。一方で、労働組合は男性中心の価値観に囚われ女性労働者の組織化を軽視する傾向があった。そもそも、女性労働者は男性労働者に比べて教育程度が低く権利意識を持ちにくい状況にあった。これらの要因が重なり合って、女性たちは、ただでさえハードルの高い労働運動から遠ざけられた。

プロレタリア文学においても、女性労働者は他者化、周縁化される傾向がある。<sup>\*4</sup>たとえば、小林多喜一『党生活者』には、共産党員の女性闘士伊藤が登場するが、物語の舞台である倉田工業（八〇〇人の労働者のうち七割は女性である）において伊藤によるオルグの対象となる女工たちは個性がなく、付和雷同的である。共同印刷争議を題材とした徳永直『太陽のない街』には闘士の高枝を始めとして多くの女性が登場する。しかし、高枝の妹の加代が男工の宮池と肉体関係を持ち妊娠し出産によって命を落とすエピソードや、婦人部のメンバーが女性組合員による売春の是非について貞操の観点から論争するエピソードが示すように、女性登場人物は女性性への過度な注目がなされる傾向がある。再度現実を目を向けるならば、女性労働者による労働運動は低調だったと言っても、注目すべき動きが存在しなかったわけではない。とりわけ昭和恐慌下の一九三〇年には、東洋モスリン、鐘淵紡績、岸和田紡績、富士紡績、東京モスリン、倉敷紡績などで労働争議が相次いだ。プロレタリア文学にも、これらの争議に関わる作品がある。東洋モス

リン争議については、本稿で取り上げる中本たか子の「恐慌―けれどもそれは未来につゞく」、「闘ひ」、「鎖」、「工場の前衛」、「卑怯者去らば去れ」、「レポーター年枝」、「再び工場へ」、「東モス第二工場」、「早春」、「歷程」、「モスリン横丁」のほか、細田民樹『真理の春』がある。鐘淵紡績争議については久板栄二郎の戯曲「北東の風」、東京モスリン争議については佐多稻子による五部作（「幹部女工の涙」、「小幹部」、「祈祷」、「強制帰国」、「何を為すべきか」）、倉敷紡績万寿工場争議については今野賢三『女工戦』がある。

本稿では、これらの作品のうち、東洋モスリン争議と、それに先立つ時期の労働運動を題材とした中本たか子の一連の作品を取り上げて、労働運動に参加する女性たちの姿がどのように描かれているのかを考察したい。中本の作品は、一九二九年末から三〇年初めにかけて中本が全協（日本労働組合全国協議会）のオルグとして東洋モスリンの労働運動に関わった体験に基づいて書かれている。したがって、まず次節では、東洋モスリン争議について概観し、この争議における女性の位置づけについても考察しておきたい。

## 二 東洋モスリン争議と女性

### (一) 争議の概要

東洋モスリン（以下、洋モスと略記）は一九〇七年に創業された羊毛紡績の大手企業であり、亀戸、練馬、静岡に工場を擁していた。一九三〇年に洋モスで争議が発生した背景として、昭和恐慌下における紡績業全体の窮状に加え、関東大震災後経営不振が続き多額の負債を抱えていた洋モスにおいて大規模な整理更生が断行されたことが指摘

できる。

洋モス従業員の多くは、中間派の日本労働組合同盟（一九三〇年六月より全国労働組合同盟（全労）傘下の日本紡織労働組合洋モス支部協議会に組織されていた。ただし、亀戸四工場のうち第二工場の従業員の一部は右派である総同盟系の支部に所属していた。他方で、第二工場では舎監の内山ちとせが中心となり共産党細胞が組織され、全協の指導を受けて組合同盟反対派を形成していた。

洋モスでは、一九三〇年に二度の争議が発生した。<sup>※</sup>第一次争議は、二月一日、会社側が綿紡部の第二工場（男二〇〇人、女六〇一人）を閉鎖し、男工は解雇、女工は他工場に転勤させる旨従業員側に通告したことを発端とする。これに対して総同盟も組合同盟も工場閉鎖と従業員の解雇に反対し争議体制を整えたが、足並みはそろわなかった。交渉決裂後の二五日には、第三工場、第四工場にもストライキが波及したが、成果を見ないまま幕切れとなった。二八日、総同盟側が組合員八四名中一七名の復職により会社側と妥結する一方、組合同盟側は組合の承認を得るのみで復職を勝ち取ることはできなかった。

第二次争議は、九月二〇日、会社側が第三工場の綿紡部（男六三人、女四二五人）と営繕部（男六八人）を閉鎖し、全員の職首を通告したことを発端とする。組合側は「強制帰国」に反対すると共に、職首労働者の練馬・静岡への転勤、希望退職者の募集、一〇〇日分の手当の支給を要求し、二六日から全工場の従業員約二、五〇〇名がストライキに突入した。会社側の切り崩しは猛烈を窮め、暴力団を使って労働者を威嚇する一方、保護者への働きかけを行い寄宿女工の「強制帰国」を促した。さらに一〇月一四日には、争議団の中心だった男女一三七名に解雇を通告した。組合側では二四日、全労東京地方連合会が大規模な応援デモ（「市街戦」）を行い、争議団からも検束者が続出した。その

ため、日本紡織労働組合組合長の藤岡文六が急遽関西から上京し、争議団長に就任して事態の収拾を図った。他方で、寄宿女工四五〇名は寄宿舎より出て組合関係者の家に分宿したが、会社側はこれを好機として、先に帰郷した女工を呼び寄せるなどして操業を再開した。追い詰められた争議団は一月二二日、警視庁の調停を受け入れ、「解雇者一三六名並びに営繕部閉鎖による退職者六六名は復職させない」、「綿紡部閉鎖による退職者四八六名中会社社の選択により一〇〇名に対し新たに採用通知を送送する」、「営繕部及び綿紡部の閉鎖による退職者に対しては日給の二九日分を支給する」、「会社更生の時に当たり社規を振束するため、今後就業規則その他の社則に違反した従業員は処分する」など六項目の条件をのみ、ストライキを打ち切った。

## (二) 洋モス争議と女性

洋モス従業員の大多数は女性であり、一九三〇年の二度の争議で女工たちは目覚ましい闘いぶりを発揮した。<sup>\*6</sup> 女工たちは、連日寄宿舎内で労働歌を歌いデモを行って氣勢を上げる一方、暴力団や警察に体を張って立ち向かい、会社の逆宣伝に乗せられて「強制帰国」を促す家族に対しても激しく抵抗した。なお、こうした闘いの多くは労働組合の組織的な指示によるものではなく、女工たちの創意によるものだったとされる。労働女塾（後述）を通じて女工たちに大きな影響力を及ぼした帯刀貞代は、自伝の中で第二次争議について次のように回想している。

これ「資本家側の攻撃——引用者注」に対してほんとうにたたかおうとするなら、何よりも紡績労働者の全部をたたせなければならず、本来、情においてもわが子につながり、しかも農業恐慌にあえいでいる貧農の父母た

ちを争議の陣営にむすびつけなくてはならず、か弱い少女たちに対して、暴力を動員してくる非人道性に対して、徹底的にたたかわなくてはならなかった。が、これらのたたかいを、ほんとうにたたかかったものは争議団ではなくて、少女たち自身であった。(略)少女たちは、他工場に働く友だちに対していっしょにたたかおうとけんめいに手紙を送り、親たちに幾本も手紙を書き、暴力団に対しては、ほうきの柄を削って竹槍をつくり、灰や砂で目つぶしを用意して、いざというときにそなえ、彼らの通路に糞尿を汲み出して、せいっぱい抵抗をした。暴力団と警官と父母と、三〇人、五〇人が束になってやってくる引きぬきに対しては、彼女たちみずから弾丸隊と命名した前衛隊をつのって、真っ先に飛びだして人垣をつくって守った。彼女たちは、外の争議団としゃ断されている間に、まったく自分たちの創意でこれらのたたかいをした。(『ある遍歴の自叙伝』、草土文化、一九八〇年、九七―九八頁)

ただし、女工たちが「自分たちの創意」で闘うことを余儀なくされた理由は、争議団から物理的に遮断されていたためだけではない。帯刀は争議団に対して指導方針についての意見を何度も伝えたが聞き入れられず、むしろ「少女たちを扇動しているような印象を幹部たちに与え」、「統制をみだすとはげしい非難をうけた」<sup>\*7</sup>。そればかりか帯刀の息のかかった労働女塾の女工たちは「裏切り者」として組合幹部に冷遇された。争議終了後に組合幹部から解雇手当を手渡される際、殴られた女工もいたという。<sup>\*8</sup>

鈴木裕子は、洋モス争議における組合幹部の争議指導・体制の問題点を男性中心の争議団の布陣に求めている。鈴木によれば、争議団の幹部、役員はほぼ全て男性で占められ、女性は統制部員四三名中八名のみだった。そのため、

「寄宿舎内で頑張る女性労働者の要求や動静を正しく反映した争議指導を行なうことは不可能に近」\*<sup>9</sup> かった。さらに、争議団は「争議の主体を形成すべき女性労働者の要求をくみあげることにも、階級意識を高めることにも不熱心であった」\*<sup>9</sup>。

こうした状況の下で、労働女塾と無産婦人同盟が女工たちの闘いを支えた意味は小さくなかった。労働女塾は亀戸の工場街に住む帯刀貞代（当時は織本貞代）が一九二九年七月、女工たちを対象として開設した私塾である（一九三〇年一二月閉鎖）。帯刀は、中間派である日本労働党系の全国婦人同盟、日本大衆党系の無産婦人同盟の結成に参加した運動家で、一九二八年の春頃からは日本紡織労働組合の常任書記を務め、機関誌『正義の光』の編集にも携わった。帯刀の夫の織本侃は日本労働党、日本大衆党の幹部だった。

開塾を知らせる一九二九年八月二二日付けのビラによれば、労働女塾は「合理化の嵐に直面する婦人労働者がその全力を挙げて自らの防衛に、解放の為の闘争により鞏固なる組織と鉄の如き訓練とを持つこと」\*<sup>10</sup> が急務であるとの認識の下で、「婦人闘士の養成を使命として」開設された。その甲斐あって、塾生は、洋モス第二次争議における女工たちの闘いの中核を担った。

とはいえ、労働女塾は「闘士の養成機関」のイメージとは異質なアットホームな空間だったようだ。帯刀は自作のパンフレット『労働婦人問題』や山川均『資本主義のからくり』などをテキストにして資本主義の仕組みや女性問題について講義したほか、裁縫や料理も教えた。塾生と共に大船の撮影所を訪れたり、鎌倉見物をしたり、映画を見に行ったりすることもあった。さらに、夕食時には男性労働者も交えて、大人数で賑やかに食卓を囲んだようだ。なお、労働女塾が一九二九年七月に開設された背景には、一九二九年六月末をもって女性の深夜業が全面的に禁止されたこ



とが関係している。<sup>\*11</sup>

無産婦人同盟は、一九二八年一二月、中間派の無産政党の再編による日本大衆党結成を背景として、旧日本労農党傘下の全国婦人同盟と旧無産大衆党傘下の無産婦人連盟の合同により誕生した女性団体である。<sup>\*12</sup>鈴木裕子によると、無産婦人同盟は、結成当初は日本大衆党内の内紛から組織を守ることに力を削がれて独自の活動ができなかったが、洋モス第二次争議の応援には「組織の勢力をあげて」取り組んだ。<sup>\*13</sup>無産婦人同盟拡大委員会（一九三〇年一二月四日開催）の議案書にある「洋モス争議報告」（説明者は織本貞代）では、無産婦人同盟による争議支援を「救援、救護の運動」寄付金募集、負傷者病人の救護等、「家族の引き締め」家族会の組織、少年団の組織、「争議団員の教育」研究会（一般二回）討論会（数回）、「輿論喚起」批判演説会（同盟主催のもの）檄、ピラ等（数回）の四事業として<sup>\*14</sup>いる。なお、労働女塾の主事であり無産婦人同盟中央委員でもあった帯刀にとつて、両組織の活動は重なっていたと考えられる。帯刀のみでなく、小林たね、大滝やすのらも両組織に参加していた。

### （三）洋モス争議と全協

最後に、洋モス争議と全協（日本労働組合全国協議会）の関係について述べておきたい。全協は三・一五事件後に解散を命じられた評議会の後身となる左派労働組合の全国組織であり、一九二八年一二月に結成された。全協は半非合法状態におかれたため、合法組合内でダラ幹批判を行いながら批判的な組合員をフラクション（革命的反対派）に組織する活動を行った。<sup>\*15</sup>洋モスでは、第一次争議以前に第二工場内に全協の分会が組織されていたことが指摘されているが、<sup>\*16</sup>第二工場閉鎖後も全協の影響力は維持された。渡部徹は第二次争議における女工たちの戦闘的な闘いの背景

として、「洋モス女工の中に全協の組織がのび、闘争の核心を形成して」いたことを指摘しているし、<sup>\*17</sup> 帯刀貞代も、洋モス争議の際に岸和田紡績争議と似た戦術がとられたことをふまえつつ、「指導は全協だと思おう」と述べている。<sup>\*18</sup> なお、一九三〇年七月に東京モスリン亀戸工場で発生した労働争議に取材した佐多稲子の五部作でも、全協の活動が詳しく扱われている。<sup>\*19</sup>

なお、帯刀は洋モス第二次争議後、一九三二年に検挙されるまで共産青年同盟の活動に従事したが、「全協の組織につ」くことを希望して、当初数ヶ月間は凸版印刷の女工の組織活動に携わった。<sup>\*20</sup> 中本たか子『モスリン横丁』（冬芽書房、一九五〇年）には、労働女塾を主宰する島本里代（モデルは帯刀貞代）をめぐる次のような描写がある。

一さいのダラカンときつぱり訣別することだ——里代はけつぜんと臍をかためた。そして、そうすることは、現在では、やはり左翼のうんどうであり、したがって地下活動よりほかないのだ。どうしてもそこへおもむかねばならないだろう——里代はあたらしくひらけた視野をみつめた（二七三頁）。

争議敗北直後の里代の心理描写であるが、争議後の帯刀の転身をふまえた記述と言えるだろう。

### 三 中本たか子の洋モス関連の作品

#### (一) 中本たか子について

中本たか子は、一九〇三年、山口県豊浦郡角島に生まれた。県立山口高等女学校卒業後に県内の小学校で教鞭を執った後、作家を志して一九二七年に上京した。当初は、横光利一の影響を受けて新感覚派風の作品を発表したが、一九二九年一〇月、女人芸術社の講演会で知り合った帯刀貞代を頼って亀戸の「モスリン横丁」に転居した。<sup>\*21</sup> やがて中本は、全協のオルグとして洋モスの女性労働者の組織活動に関わるが、一九三〇年二月、第一次争議前に検挙され、三日間拘留された。釈放後は共産党のシンパとして活動したものの、同年七月に再び検挙され、性的拷問を受けて精神を病み松沢病院に収容された。一九三一年一〇月に保釈された後は、川崎窯業会社で臨時女工として働いた後、福岡で全協のオルグ活動に関わったが、一九三三年二月に再度検挙された。公判では転向（政治運動からの離脱）を表明したが、過去の性的拷問を告発した上、治安維持法撤廃を主張したために四年の実刑判決を受け（恩赦により三年に減刑）、広島県の三次刑務所で服役した。出獄後は、「白衣作業」（『文芸』一九三七年九月号）、「南部鉄瓶工」（『新潮』一九三八年二月号）、『耐火煉瓦』（竹村書房、一九三八年）、『新しき情熱』（金鈴社、一九四三年）など国策文学の一環である「生産文学」を精力的に執筆した。戦後は平和運動に専心し、『滑走路』（宝文館、一九五八年）、『不死鳥』（弥生書房、一九六〇年）、『はまゆう咲く島』（新日本出版社、一九六八年）、『とべ・千羽鶴』（青磁社、一九八八年）などの作品を発表した。<sup>\*22</sup>

## (二) 洋モス関連の作品

先述のように、中本が亀戸に移り住み女工たちの組織活動に関わった期間は、わずか四ヶ月程度にすぎない。しかし中本はその体験を基にして、少なくとも以下一一点の小説を発表している。

- ① 「恐慌——けれどもそれは未来につゞく」(『女人芸術』二卷一〇号(一九二九年一〇月号))
- ② 「闘ひ」(発表誌不詳、『闘ひ(新鋭文学叢書第一三編)』(改造社、一九三〇年)所収)
- ③ 「鎖」(発表誌不詳、『闘ひ』所収)
- ④ 「工場の前衛」(『プロレタリア文学』(白揚社版)一九三〇年七月号)
- ⑤ 「卑怯者去らば去れ」(『改造』一九三〇年一〇月号)
- ⑥ 「レポーター年枝」(『文学時代』一九三二年一月号)
- ⑦ 「再び工場へ」(『文芸春秋』一九三二年三月号)
- ⑧ 「東モス第二工場」一〜六(『女人芸術』五卷一号(一九三二年一月)〜五卷六号(一九三二年六月))
- ⑨ 「歷程」一・二(『思潮』一三三号(一九四八年九月)、同一四・一五号(一九四八年十一月))
- ⑩ 「早春」(『新日本文学』一九五〇年二月号)
- ⑪ 『モスリン横丁』(冬芽書房、一九五〇年)

これまでに中本たか子の全集や著作集は出版されていない。二〇〇〇年頃に『闘ひ』、『恐慌』、『職場』、『新しき情

熱』、『耐火煉瓦』、『南部鉄瓶工』などの復刻が相次いだものの、研究はあまり進んでいない。<sup>\*23</sup> 数少ない先行研究は転向後の国策文学に関心を向けるものが多い。東洋モスリン関連の作品については、管見の限り、①から⑦までを収録した『日本プロレタリア文学集』二二巻「婦人作家集(一)」(新日本出版社、一九八七年)の巻末に佐藤静夫の解説が収録されているほかは、浅尾大輔「中本たか子の心の傷」後編『民主文学』六七六号、二〇一七年一月)六節に「闘ひ」などの作品について言及が見られる程度である。

以下では各作品の梗概をまとめるが、<sup>\*24</sup> それに先立って留意すべき点について述べておく。

第一に、作品の題材に関わる点として、ほとんどの作品が一九三〇年二月の第一次争議開始以前の時期を扱っていることである。第一次争議を主題とした作品には⑩「早春」があり、⑨「歷程」と⑪『モスリン横丁』も限定的ながら第一次争議を扱っている。一方で、第二次争議そのものを扱った作品は存在しない(⑦「再び工場へ」は第二次争議の後日談である)。先述したとおり、中本が亀戸で女工の組織活動に関わった期間は第一次争議の直前までであり、第一次争議の期間は拘留中だった。さらに、第一次争議後は女工たちとの接点が失われ、その後の共産党のシンパ活動により第二次争議の前に拘留・投獄された。

第二に、作品の執筆時期に関わる点として、①「恐慌」が亀戸に移り住む以前に執筆されていることである。②「闘ひ」以下の作品が組合同盟反対派あるいは工場細胞の活動を中心に描いているのに対して、そもそも①「恐慌」では組合同盟と反対派の対立に関する記述がない。他方で、①「恐慌」には経営者へのクローズアップが見られる上、日本の紡績業の動向をグローバルな視点で捉える描写もあり、実体験に基づく②「闘ひ」以下の作品とは作風が異なる。ちなみに、共産党員と警官、憲兵との間の攻防をめぐる活劇風な描写を含む②「闘ひ」も、③「鎖」以下の作品とはやや異質である。

第三に、作品の発表時期に関わる点として、⑨「歷程」以下の作品が占領期に発表されていることである。戦後の中本は平和運動に専心したとされるが、再出版に当たって洋モス関連の作品を三点執筆していること、三点とも中長編のボリュームを備えていることは注目されてよい（戦前に書かれた作品は、⑧「東モス第二工場」を除いて短編である）。さらに、⑨「歷程」は女主人公の半生記中に労働組合運動の経験を位置づけている点、⑩「早春」は第一次争議を主題としている点、⑪『モスリン横丁』は亀戸における中本の経験を総括する集大成的な性格を持つ点において注目すべき作品である。

### (三) 各作品の梗概

#### ①「恐慌——けれどもそれは未来につづく」

一九二九年六月から七月にかけて、T・S紡績の経営者と労働者の状況を並行させて描いた作品である。物語は、T・S紡績社長の広沢賢三と「金で買いつつた花嫁」である靖子との結婚式の後から始まる。広沢はS内閣（モデルは田中義一内閣）の非金解禁の方針に安堵し、インドとイギリスにおける労働争議の激化を好機としてインドへの綿布輸出に期待を託すが、競合会社の参入とS内閣倒壊の報せにより雲行きが怪しくなる。日分工場では、住田シゲの労災事故をきっかけとして労働組合がストライキを起こすが、弾圧により一名が死亡、一七名が拘留され、一五〇名が誠首される。最終節の舞台は兜町の株取引所である。新内閣（モデルは浜口雄幸内閣）が公表した金解禁の方針による紡績株の大幅な下落が描かれ、紡績業の暗い未来を予告する女性投資家の言葉により物語が閉じられる。

#### ②「闘ひ」

一九三〇年二月、男子普通選挙制度下での第二次総選挙における共産党の選挙闘争が描かれる。共産党の「興廢を

かけ」た選挙闘争であり、参加者には武装が命じられる。N紡績の工場では、本部レポーターの澄代、工場分会のオルグで党員の島村、工場分会のレポーターのシツのルートで党のビラが持ち込まれ、同志の女工たちが手分けして工場内の至る所にビラを貼る。ビラに書かれた「日本共産党」の五字は全工場に「異常な戦慄」をもたらすが「犯人」は露見しない。この成功に気を良くした島村は、「もつと資本家どもをおつたまがせてやろう」と考え、寄宿舎内で候補者名の入ったビラをまくよう指示する。工場の外では、路上、波止場、貧民窟、演説会場などで共産党のビラがまかれ、警官、憲兵が党員逮捕に躍起になる。物語の終わりの方で、分会メンバーのフジエは警察に連行され、澄代はスパイ（「チョビ髯」）に追い込まれ、アジトを包囲された島村はピストルを手に河岸へ落ちのびる。

③ 「鎖」

女工ハツの闘士としての成長を描く作品である。小学校卒業後にF紡績の女工となったハツは階級意識に目ざめ、寄宿の世話係である女子大卒の吉本と共に「俺達の組合」を組織する。合理化のために会社が寄宿の「部屋換え」を発表すると、組合の主導により女工たちが帳場に押しかけてデモを行い会社の方針を撤回させる。「俺達の組合」は女工たちの信頼を獲得して勢力を拡大し、工場細胞も組織される。ハツは工場細胞のキャプテンとなり党活動に勤しむ。最後にハツは「スパイ」の手で留置場に入れられ、拷問を受ける。「ハツはいかなる拷問にも打ち堪えて行く、彼女はプロレタリアの前衛であるから。——そして、彼女は堅く守って行く、前衛党の組織を」という一節で物語は終わる。

④ 「工場の前衛」

Kモスリン××工場を舞台として、工場細胞に所属する女工たちの活動を描いた作品である。女工のキクエらは勤務時間中に極秘で工場ニュースの配布を行うが、監督に見つかってしまう。それを知ったオルグの田辺は幹部女工ら

忠告する。その後工場では、ウメヨが見廻りの解田に突き飛ばされて背骨を折る事件が起こり、キクエらは解田の排斥を求めてストライキを行うことを決める。ストライキの前夜、キクエは、電気を止めるために電気部屋に行つて電動機に大量の砂を投げ込む。

⑤ 「卑怯者去らば去れ」

一九三〇年一月頃、全協のオルグの高山龍枝を中心に、洋モス第一工場における全協分会の活動を描いた作品である。タイトルが示唆するとおり、作品の主題は仲間の組織からの離反である。女工のキクは「スパイ」(警視庁労働係)に脅されて組織の秘密を漏らした後、組合から離れる。寄宿「菊」の寮長の春木芳子は「スパイ」に脅され、女工の動静を探つて密告することを約束させられる。女工のハナエは工場の主任を通じて「スパイ」に引き渡され二日間留置場に入れられた後、龍枝に組合脱退の意思を告げる。その後、龍枝は三人が共謀して組合加入を妨害しているとするレポを受け、ビラで彼女らの「裏切り」を暴露する。その結果、全協の分会のみならず組合同盟においても「裏切り者」の三人に対する不評と反感が高まり、龍枝らは新しい組合員を獲得する。

⑥ 「レポーター年枝」

反対派の組合で活動する一六歳の女工である年枝についての物語である。年枝は、組合の組織者である寮長の関口鳥子の指導を受けながら、上部組織との間のレポを担う。ある時、年枝は党のビラを工場に持ち込む仕事を任される。工場細胞のメンバーが工場内にビラを貼ると、工場は騒然となり警察による訊問が行われる。二日後、年枝は工場外で「チョビ髭の男」に捕まり警察に連行される。取調べの最中、年枝は関口から託された薄い紙の報告書を口の中に入れ、それを吐き出させようとする。「スパイ」から激しい拷問を受ける。



⑦ 「再び工場へ」

一九三〇年一二月から翌年一月にかけて、第二次争議の後日談というべき作品である。Tモス工場における「十月、十一月の争議」により解雇されたサキは相川モス工場に再就職し、全協の組織活動に取り組む。サキは争議に破れた後に「組織を投げ出して逃げた」ことを恥じ、全協の運動家である坂田を避けていた。しかし、再就職後は坂田と連絡を取りながらオルグ活動に打ち込む。サキは親しくなった女工たちに「おれ達同志の組合」を持つ意義を説き、皆で手分けをして組合（全協日本繊維相川モス工場分会）の結成を呼びかけるピラをまく。

⑧ 「東モス第二工場」

一九二九年二月から夏にかけて、東モス第二工場における組合同盟反対派の結成と発展を描く物語である。新任の寮長牛山千枝は女工たちから信頼を得て、全協オルグの戸田の協力の下で組合を結成する。幹部女工らは組合同盟のダラ幹ぶりを攻撃する一方で、職場に対する女工たちの不満をくみ上げ、日常闘争を組織しながら組合員の拡大を図る。組合活動が軌道に乗り始めた頃、戸田と牛山は上部からの指示により経済闘争を政治闘争へと引き上げるべく、有能な女工たちを政治的に組織することを計画する（未完）。

⑨ 「歷程」

労働者階級出身のトモエの半生を描いた作品である。女工のトモエは、亀戸のモスリン工場で労働運動に関わるようになる。労資協調的な組合同盟を飽き足らなく思っていたトモエは、寄宿の世話係の牛田ちか子が指導する組織の活動に打ち込む。けれども、やがて弾圧が強まり、牛田もトモエも上部組織のオルグの来島健一も検挙されてしまう。トモエは数ヶ月後に釈放されるが、解雇されていたことを知る。モスリン工場で争議が始まると、トモエは工場の外

から「左翼」の指導を担うが、再度検挙される。釈放後、トモエは争議を通じて知り合った左翼の労働運動家の工藤久太郎と結婚して二人の子をもうけるが、工藤は戦死する。敗戦後、トモエは決意を新たにして居住地細胞に参加する。

⑩ 「早春」

一九三〇年二月一日から三月一日まで、東方モスリン会社第二工場を舞台とする争議（第一次争議）を、テルを中心とする反対派の動きに焦点化して描いた作品である。第二工場では牛山千春の指導の下で反対派が組織されていたが、弾圧が強まり牛山が姿を消した後、幹部女工七名も検挙される。争議が始まると、男工の野原は反対派から離れて組合同盟に加わる。幹部女工のミネらも、反対派が会社から交渉相手として認められないことに不安を抱いて組合同盟に鞍替えする。反対派は争議の切り崩しを目論む暴力団、警察、「強制帰国」を促す家族に対して戦闘的に闘う。テルら幹部女工七名が検挙された後、組合同盟と総同盟の「ダラ幹にうられて」争議は収束する。争議終結後、野原やミネは組合同盟に寝返ったことを誤りと認め、テルらに謝罪する。

⑪ 『モスリン横丁』

一九二九年一〇月初旬、作家の高木民枝が労働女塾を主宰する島本里代を頼って亀戸のモスリン横丁に移り住んでから、二月初めに検挙・拘留され、洋モス争議（第一次争議）の終了後に釈放されるまでを描いた作品である。一二月初め、民枝は全協の依頼で第二工場の組合同盟反対派の研究会で講師を務めることになり、これをきっかけに反対派のオルグ活動に関わるようになる。民枝は労働女塾に出入りする女工のキヨ、トキ、カズヨ、チエらを合法主義の運動から反対派に鞍替えさせる。しかし、年末に第二工場の寮長である小見山千賀子が地下に潜った頃から弾圧が強

まり、やがて第三工場の寮長の木下春子、キヨ、カズヨが組織から離脱し、トキと民枝も検挙される。争議後に釈放された民枝は、女工たちに「何といつても、私たちはまたやるより他ないわ。一生がいたたかわなくちやならないわ。もつとつよくなるうね、もつとつよく……」と語りかける。

#### 四 作品の考察

##### (一) 女たちの労働運動

中本の洋モス関連の作品に描かれる労働運動の担い手は、女工であれ、寮長や寄宿舎の世話係であれ、インテリの運動家であれ、その多くは女性である。洋モス従業員の大部分が女工であったことを考慮すれば、それは当然のように思える。けれども、第二節で見たとおり、当時の労働運動は圧倒的に男性中心だった。鈴木裕子は、洋モス争議における争議団の幹部・役員はほぼ全て男性であり、女性労働者の要求をくみ上げたり階級意識を高めたりすることに関心を持たなかったと指摘していた。

中本の作品でも亀戸に移住する前に書かれた①「恐慌」では、「先鋭な闘士」であるところの男工の緒方、清水、浜松が労働運動をリードする。住田シゲの労災事故について話し合うために組合幹部を招集するのは女工の岡村ハツと後藤ミヤであるが、幹部会議で議長を務めるのは「その秀でた赤銅色の額と濃い眉とが示す意示いひの強さをもって、いかなる争議と雖も、徹底的に押し通す男」と評される緒方である。緒方は、住田の事故をめぐる会社の対応の問題点を指摘した上で、会社の能率重視の姿勢を批判し、さらには深夜業廃止を口実とする合理化を警戒する。この緒方の

発言の後、浜松が争議に進むことを提案し、清水とハツが「異議なし!」と応じる。その後、緒方の提案した争議対策をたたき台にして嘆願書が作成され、争議開始となる。

一方で、反対派の運動を中心に描く②「闘ひ」以下の作品では、男工は周縁化されている。もちろん反対派は全協の指導下にある。②「闘ひ」の島村、④「工場の前衛」の田辺、⑥「レポーター年枝」の木村、⑦「再び工場へ」の坂田、⑧「東モス第二工場」の戸田、⑨「歷程」の来島健一、⑩「早春」の西本、⑪『モスリン横丁』の吉本と小宮など、中本の作品に登場する全協のオルグは例外なく男性である。しかも、これらの男性の多くは運動熱心な人物として好意的に描かれている。たとえば⑧「東モス第二工場」の戸田は、女工たちに対して開口二番、「おい、キヤウダイ、お前さん達は仕合わせかい」と話しかけ、女工たちから巧みに職場の不満を引き出して組合の必要性をアピールし、組合活動を行う上での注意点を説明する。女工のカツは「おれ達をキヤウダイーと云つた、あの素晴らしい男が俺達の味方なのだ。おれ達がか弱い女工だが、あの男がついて呉れ、ばどんなに力となるだろう」と、戸田に男性的な魅力を感じ、深い信頼を寄せる。

ただし、中本の作品に登場する、より頼もしい指導者は、洋モス第二工場の舎監であった内山ちとせをモデルとする女性の寮長または寄宿舎の世話係である。⑥「レポーター年枝」では関口鳥子、⑧「東モス第二工場」では牛山千枝、⑨「歷程」では牛田ちか子、⑪『モスリン横丁』では小見山千賀子として登場する。⑧「東モス第二工場」では、牛山千枝が女工たちに労働運動のイロハを手取り足取り教え、彼女たちを逞しい幹部に育て上げるプロセスが丁寧に描かれている。もちろん中本の作品にくり返し優れた女性リーダーが描かれた理由は、内山ちとせというモデルが存在したからであろう。しかし、そもそも寄宿女工にとっては、工場の外にいる非合法組織の男性運動家よりも、女性の寮長や寄宿舎の世

話係の方がはるかに身近で頼りになる存在であったように思われる。ただし内山は、一九二九年末に組織の判断で姿を消してしまう。以後は現実においても、作中でも、残された女工たちは自力で運動を継続することを余儀なくされる。

第一次争議を描いた⑩「早春」では、第二工場の指導者牛山千春が一九二九年の大晦日に姿を消し、次いで七人の幹部女工が検挙される。争議開始の一週間前には全協との連絡も途絶えてしまう。さらに、争議開始と共に男工の野原を始め多くのメンバーが組合同盟に参加するために反対派を離れる。残された女工のうち、リーダーシップを発揮するのはテルとスエである。野原の離反を知ったスエは、テルに対して「あなたは野原さんと仲がよかつたので、野原さんについてあつちへいくだろうと、おれ、いま考えていたところなんだよ」と述べる。野原に恋愛感情を抱いていたテルは思わず顔を赤らめつつも「ちがうよ」と言って否定した後、「あのひとはあの人であつちへいつても、おれたちはおれたちでやらなきやらないよ」と答える。その言葉を聞いたテルは「そうか、よし、あなたのその気持がわかれば、おれも組合同盟なんかの指導はいやだよ」と応じ、スエと手を堅く握り合う。その夜、二人は一組の布団の中で「しつかり腕をくんで」眠る。

## (二) 否定的な男性運動家像

労働運動に関わる男性を否定的に描く作品もある。⑨「歷程」に登場する来島健一は、「インテリ出」の上部組織のオルグである。主人公のトモエは来島に対して激しい恋心を抱き、検挙により来島と離れた後も憧憬と思慕を持ち続ける。けれども、トモエは戦中に家を訪ねてきた来島から獄中で転向したことを聞かされると、「あまりに大きく裏切られたものをおぼえて、腹の底から血の気が逆上していくいかりにかられる。にもかかわらず、トモエは、「愛情も

なく、またそれを欲したのでもなく、たゞ「夫の——引用者注」工藤を裏切ることの快さ」から、迫られるままに来島と肉体関係を持ち、子を妊る。トモエの出産後、来島は再度トモエの家を訪れるのだが、金をせびることが目的と知ると、トモエは来島に対して「憎悪と軽蔑」を抱く。

第一次争議を描いた⑩「早春」の野原は、争議に際して反対派から組合同盟に鞍替えする。野原は、「こんなはなれ小島のような状態でたたかうことは負けにきまつてるよ。おれたちはこの際、大きなものをたよりにしなければたにかいにかてないんだ」、「反対派ぢや、会社はけつしてくびをつないでくれないよ」といった発言が示すように、やや小心で日和見的な人物である。一方で、ある男工は野原の主張に同調しつつ、「女工ばかりで何ができるか！ 男の幹部がいなくちや、お前たちには少しもストライキのやり方がわからないだろう！」と、女工をあからさまに見下す発言をする。女工の中からも「しっかりした男の人にたよらなきゃ駄目よ」という声上がる。こうした発言は、スエやテルら反対派に留まった女工たちの自立性や逞しさを印象づける。

⑫『モスリン横丁』には二人のダメ男が登場する。一人は女工キヨの恋人の坂田である。相川染工場で働く坂田は、かつて評議会の闘士であったが、現在は評議会時代の自慢話をしたり、共産党の合法新聞である『無産者新聞』をキヨに届けたりするのみで、闘っている様子はない。坂田は組合同盟を「ダラ幹の巣窟」、労働女塾の里代を「合法主義者」として揶揄する一方で、キヨが反対派の運動に深入りすることをあからさまに嫌悪する。キヨが警察から呼び出しを受けたことを知ると民枝を家に呼んでそのことを告げ、キヨが反対派の運動をやめたがっていると伝える。民枝はキヨが自ら意思表示しないことに疑問を持ち、坂田の話に「僭越」なひびきを感じとる。

なお、『モスリン横丁』では、キヨは民枝や里代と並ぶ視点人物の一人である。当初キヨは民枝と意気投合して反対

派の組織活動に前のめりになるが、坂田に「いたわりと愛情」を示され肉体関係を持つと、民枝の「ひたむきな態度」と「坂田とつながる感覚」の間で「振子のようにゆれうごく」。さらに「スパイ」に遭遇して怖じ気づいたキヨは、「はやく今のうちに、高木民枝と手をきらなくちやいけないよ」と叱る坂田に対して「さからう力」が出なくなる。こうしたキヨの心理描写にはリアリティがある。

『モスリン横丁』に描かれるもう一人のダメ男は島本里代の夫の計一である。組合同盟の組織部長である計一はタ イピストの遠藤幸子と浮気しており、里代は夫の浮気に苦しんでいる。里代のモデルは帯刀貞代（当時の姓は織本）、計一のモデルは帯刀の夫の織本侃であるが、計一の浮気も実話に基づく。織本侃の浮気相手は帯刀もよく知る同志であった上、そのことが論壇・文壇でゴシップのネタにされたため、帯刀の苦悩は深かった。戦後、帯刀は労働女塾を始めた動機を「三角関係」だったと明言している。<sup>\*26</sup>

『モスリン横丁』に話を戻すと、計一は、里代と幸子の二人に経済的に依存しながら亀戸の家と本郷の下宿を行ったり来たりして生活している。里代は離婚を考えるものの、計一から、組合同盟の組織部長としての体面を維持するため婚姻関係を維持して欲しいと「嘆願」され、求めに応じる。一方で、里代は計一が組合同盟の組織部長でありながら、争議に熱心でない様子に「心から唾棄したい情」を抱くようになる。

計一は労働女塾に出入りする女工たちに嫌われている。女工たちに対して傲慢な態度をとり、無知を嘲笑したり容姿を揶揄したりするためである。女工たちは里代に向かって計一が来るならば塾には来ないと言い出す。里代がその理由を問うと、キヨは「男の人がくると、風儀がみだれるからです。ここは労働女塾というのだから、男の人がくる必要はありません」と答える。里代が「でも、島本はこの主人ですよ。主人がきてはいけないのですか」と問うと、

キヨは「そうですか？ 島本さん、主人は、あなたかと思つてたわ」とにべもなく答える。さらに、「一体、ここはだれの家か？」という計一の言葉を思い起こしながら、労働女塾を「おれたち女工のものだ」とも主張する。

中本が男性運動家を否定的に描く傾向は戦後の作品に顕著である。その背後に共産党のシンパ活動にまつわる苦い経験を見て取ることは困難ではない。前半生を綴つた自伝『わが生は苦悩に灼かれて——わが若き日の生きがい』（白石書店、一九七三年）によれば、中本は洋モス第一次争議後、党の幹部の田中清玄や岩尾家定のハウスキーパーとなり、やがて岩尾を愛するようになる。一九三一年末、中尾は投獄中の岩尾に結婚を申し込み、同志に相談することを条件として岩尾の内諾を得る。一九三四年九月、受刑中の中本は岩尾からの手紙により岩尾が獄中で「宗教的な転向」をしたことを知り、「すくいがたい失望」に陥る。中本にとって岩尾の転向は理想化された「前衛」イメージを裏切る許しがたい行為だった。<sup>\*27</sup>⑨「歷程」ではトモエが来島の転向を知つて幻滅するが、岩尾（および田中）の転向に対する中本の反応が重ねられていると見るべきだろう。

もっとも、男性運動家に対する中本の否定的な描写は転向問題だけに由来するわけではなからう。中本は、岩尾との関係をめぐる党の対応にも深く傷つけられた。『わが生は苦悩に灼かれて』によれば、中本はハウスキーパーとして岩尾と生活していた間に家を訪ねてきた田中清玄から、「敵のデマ」を回避するために男女関係を慎むよう求められる一方、結婚には組織の承認が必要であると告げられた上で、「もし、君が、同志のたれかと、現在夫婦かんけいをもっているなら、あっさりいつてくれ。今いわないで、あとになってそれがわかつたら、君たち二人をびつり処分するぞ！」と「威かくなはげしさをもって」問いつめられる。この時、中本は岩尾と肉体関係にあることを否定したものの、それは事実ではなかった。一九三〇年七月に検挙された時、中本は岩尾の子供を妊っており、過酷な性的拷問



を受けた後で墮胎手術を受ける。この後、中本は、「中本たか子のようなルーズな女は、組織の面よごしだから、もうふたたび組織へよせつけない」という田中の言葉を特高係を通じて伝え聞いた。中本は岩尾を純粹に愛していた上に共産党に対しても絶対的な信頼を寄せていたため、田中の言葉は二重に中本を傷つけたと思われる。その田中が転向したと知ったときの中本の怒りは想像に余りある。

もつとも、これだけの体験を持ちながらも、中本は共産党幹部の女性蔑視を十分に批判しているとは言えないし、ハウスキーパー制度の問題についても等閑視している。<sup>\*28</sup>けれども戦後の洋モス関連の作品に描かれた否定的な男性運動家像は、左翼運動にコミットした中本の壮絶な体験に裏打ちされているように思う。<sup>\*29</sup>

### (三) 女性同士の関係

中本の洋モス関連の作品において女性たちは共に闘う同志である。⑪「早春」のテルとスエの関係について見たように、多くの作品では女性同士のシスターフッドが美しく描かれている。しかし、女性同士の間には緊張関係や敵対関係が存在しないわけではない。

その一つは権力の介入による敵対関係である。⑤「卑怯者去らば去れ」と⑪『モスリン横丁』では、弾圧によって運動から離脱する女性たちの姿が描かれる。⑤「卑怯者去らば去れ」では、全協のオルグである龍枝が、「スパイ」の圧力によって反対派の組織から離れた三人の女性を「裏切り者」として断罪する。「卑怯者去らば去れ」のプロットを組み込んだ⑪『モスリン横丁』では、キヨ（「卑怯者去らば去れ」のキク）が亀戸署の労働係の野崎から呼び出され、脅しに屈して「組織のことを一切はな」してしまふ。その後キヨは恋人の坂田に背中を押されて反対派の運動をやめ、

合法組織である無産婦人同盟の運動に加わる。また、第三工場の寮長の木下春子（「卑怯者去らば去れ」の春木芳子）は、第二工場の寮長の小見山千賀子が姿を消した後に反対派から離れる。作中では、野崎が木下の許を度々訪れて圧力をかけていることが示唆される。他方で、女工のトキ（「卑怯者去らば去れ」のハナエ）は野崎を通じて万世橋に連行され、拷問により反対派の運動について白状するよう強要されるが、最後まで沈黙を守る。ただし釈放後に父親に帰郷を促されると、組合同盟支部の主事である草野にすがって帰郷と解雇を免れる。トキは「ダラ幹の巣になつてゐる組合同盟」に頼つたことを反省し、「舌をかみきりた」い気持ちになる。

このように、労働運動に携わる女性たちの間に分断を持ち込むのは国家権力であるが、中本がほぼ例外なく権力に屈する女性を「卑怯者」、「裏切り者」として描いているのは、非合法運動を絶対視し、弾圧に耐えることをヒロイックな行為とみなしているためであろう。中本は、厳しい弾圧の中で一定の「後退」を受け容れつつ、権力に対する抵抗と広汎なシスターフッドを模索するような柔軟さを欠いていると言わざるを得ない。

『モスリン横丁』では、インテリである民枝および里代とキヨら女工との間の緊張関係も描かれる。両者の間には一見対等な関係が成立しているかのように見えるが、実は「組織する―される」、「指導する―される」といった非対称性が潜在している。といつても、必ずしも「組織／指導する」インテリの側が「組織／指導される」女工よりも優位な立場にあるわけではない。

民枝は女工を組織化することが「インテリゲンチヤ」としての責務だとする気負いから、女工に対して迎合的な態度をとる。民枝はある時キヨらを怒らせてしまう。全協のオルグや寮長らと極秘の会合を持つために、自宅に遊びに来ていたキヨらを十分な説明なく帰らせたことが原因である。「同志」としてのプライドを傷つけられたキヨは、民枝

の家に寄りつかなくなる。民枝はキヨに平身低頭して謝罪するが、キヨは民枝をなかなか許そうとしない。「自分の全生命をかけてもあなた「キヨ——引用者注」を得たい」と考え、「キヨのまえに頭をたれてキヨのふりおろす鞭を甘んじてうけようと」さえる民枝の姿勢には、キヨの歎心を得ようとする態度が露骨に見て取れ、滑稽である。

里代と女工たちの間では、「指導する」立場にある里代が女工たちに「指導される」かのような力関係の逆転が生じている。里代は自立した女性であるにもかかわらず、夫である計一に対して言いたいことが言えず、計一のわがままを許している。一方で、先述のとおり、女工たちは知的な面で圧倒的に優位にあるはずの計一を容赦なく批判する。里代はフサが「男の島本さんはおれたちをばかにしていますよ」と「一人前になつて自分を主張」するのを聞いて、「悲哀と絶望とで胸がつぶれ」そうになる。里代は「自分の体面」が「みんなの足もとでふみにじられている」ことを自覚しながら「冗談がすぎたんですよ」と計一を擁護するが、「いいえ、冗談ではありません」、「あれは、しんから女工をばかにしてるんでなければいけませんよ」と否定される。里代は女工たちの意見を入れて計一を塾に來させないことを約束するが、この件で「はじめにもうちのめされ」てしまう。

さらに、『モスリン横丁』では、組織者、指導者としての民枝と里代のライバル関係も巧みに描かれている。亀戸に移り住んで間もない頃の民枝は労働運動の分野では新参者であり、里代は民枝に先んじていた。里代は初めて民枝を女工たちに紹介した際、女工たちが民枝になじまないのを見て「この地盤は何といつても自分のものであるといううごかしがたい自信と安定感」を抱く。しかし民枝が非合法運動にコミットし始めると、民枝に対してうらやみとねたみを感じるようになる。というのも、里代は、組合同盟に対して批判的である上、理論上は共産党を認めており、非合法運動に踏み出せないジレンマに悩んでいるためである。里代は自分が育てた女工たちを非合法運動に引き入れる

民枝に対して強い憎しみを抱きつつ、民枝が検挙されたことを知ると、「地下水をくみあげ、そのもつ真実を味うような清らかさ」を感じずる。とはいえ、釈放後も里代と民枝の間のわだかまりは解消しない。このような民枝と里代の関係は、政治的立場の相違のみには還元できないインテリ同士の間の変遷の難しさを示している。

## 五 おわりに

本稿では、東洋モスリン争議における女性の位置づけをふまえた上で、中本たか子の洋モス関連の作品を考察してきた。

戦前の労働運動では、組合の幹部や役員の大多数は男性であり、女性には組織化されても戦力とはみなされない傾向があった。ただし東洋モスリン争議においては、女工らは活発にデモを行い、暴力団や警察、帰郷を迫る家族に対して激しく抵抗したことが知られる。こうした女工たちの動きの背後には労働女塾の活動や全協の指導が存在した。

本稿では、全協のオルグとして女工の組織活動に関わった中本たか子による洋モス関連の作品を取り上げて、労働運動に参加する女性たちの姿がどのように描かれているのかを考察した。中本の作品に描かれる労働運動の担い手は、女工であれ、寮長や寄宿舎の世話係であれ、インテリの運動家であれ、その多くが女性である。そのことは、中本の作品が女性労働者が多い紡績工場における革命的反対派の活動を中心に据えていることと関わる。革命的反対派は全協の指導下におかれていたものの、現場の労働者を中心とした。争議の際も、非合法組織である全協は表立った指導をすることができなかった。

中本の作品では、女工たちが非合法運動に身を捧げ成長する姿が共感をもって描かれる。多くの作品において男性運動家は周縁化されている上、戦後の作品では、男性運動家の日和見主義や女性に対する傲慢な態度が否定的に描かれる。一方で、中本は女性同士の関係にも鋭い視線を向けている。女性同士のシスターフッドは権力の介入によって崩壊する脆弱さははらんでいる。インテリと女工の間にはパターンリスティックな関係性があるが、それは反転しかねない、不安定な性格を帯びている。他方で、インテリ女性の間には熾烈なライバル関係が存在する。

全体として、中本の作品は全協の活動を無批判に肯定する党派的な視点から書かれており、教条主義的な印象を免れない。しかしながら、特に戦後に書かれた作品には、亀戸における女工の組織活動やその後の共産党のシンパ活動の中で中本が垣間見たに違いない様々な矛盾も書き込まれている。それらの矛盾の多くは、「外部の敵」である権力やダラ幹に決然と対抗することを通じて解消されるものではない。それゆえにこそ、中本の洋モス関連の小説は、プロレタリア文学運動が生んだ優れた作品として今日なお読み継がれる価値がある。

### 注

- \*1 労働運動史料委員会編『日本労働運動史料』第一〇巻(労働運動資料刊行委員会、一九五九年)、II—二九「主要事業・規模及び男女別職員・職工並びにその他の従業員数」。数値は『工場統計表』(商工省)による。
- \*2 本稿では、「女工」、「男工」という言葉を歴史的用語として用いる。これらの言葉には差別的なニュアンスが含まれる場合もあるが、当然ながら本稿にはそうした意図はない。
- \*3 協調会編『最近の社会運動』協調会、一九二九年、三〇六頁。
- \*4 女性作家の作品では事情が異なる。また男性作家の作品の中にも、村山知義の戯曲「志村夏江」のように、労働運動にコミットす

る女性労働者を主人公とした作品もある。

\*5 洋モス争議に関する最もまとまった先行研究として、鈴木裕子『女工と労働争議——一九三〇年洋モス争議（日本女性労働運動史論I）』（れんが書房新社、一九八九年）がある。「市街戦」に関する研究としては、三輪泰史「東洋モスリン争議「市街戦」の社会心理——大恐慌における労働者の怒りとその背景」（『日本史研究』四八五号、二〇〇三年一月）がある。このほか、渡部徹『日本労働組合運動史——日本労働組合全国協議会を中心として』（青木書店、一九五四年）、帯刀貞代『日本の婦人——婦人運動の発展をめぐって』（岩波書店、一九五七年）、大河内一男・松尾洋『日本労働組合物語 昭和』（筑摩書房、一九六五年）、中村政則『労働者と農民——日本近代をささえた人々』（小学館、一九七六—一九九八年）などに、洋モス争議についての比較的詳しい記述がある。鈴木裕子編・解説『日本女性運動資料集成』第五卷「生活・労働II 無産婦人運動と労働運動の昂揚」（一九九三年、不二出版）には、洋モス争議に関わる資料が多数収録されている。

\*6 第二次争議では、全従業員が組合同盟系の日本紡織労働組合洋モス支部協議会に参加したが、二、四八二名中二、〇六二名は女性だった。前掲鈴木『女工と労働争議』、五一頁。

\*7 前掲帯刀『ある遍歴の自叙伝』、九八頁。

\*8 帯刀貞代・犬丸義一・小池和子「私の女性史研究——婦人運動のなから」（『歴史評論』二六四号、一九七二年七月）、「市街戦」で闘った洋モス争議と労働女塾——帯刀貞代・熊谷キクコさんに聞く」（渡部悦次・鈴木裕子編『たたかいに生きて——戦前婦人労働運動への証言、ドメス出版、一九八〇年）。洋モス争議における争議団の方針をめぐる帯刀による批判は、「日本の紡績争議に関する覚え書き」（『女人芸術』四卷一号、一九三二年一月、『日本婦人問題』ドメス出版、一九八〇年所収）、前掲『日本の婦人』（岩波書店、一九五七年）参照。

\*9 前掲鈴木『女工と労働争議』、九六—九七頁。

\*10 「労働女塾開設のお知らせ」、前掲『日本女性運動資料集成』第五卷所収。

\*11 労働女塾については、前掲帯刀『ある遍歴の自叙伝』、前掲帯刀ほか「私の女性史研究」、前掲「市街戦」で闘った洋モス争議と労働女塾、前掲鈴木『女工と労働争議』などを参照。

\*12 無産婦人同盟については、石月静恵『戦間期の女性運動』（東方出版、一九九六年）の第3章を参照。

中本たか子の洋モス関連の小説を読む

- \* 13 鈴木裕子「解説」前掲『日本女性運動資料集成』第五卷。
- \* 14 「無産婦人同盟拡大委員会議案」前掲『日本女性運動資料集成』第五卷所収。
- \* 15 前掲渡部『日本労働組合運動史』。
- \* 16 全協の機関誌『労働新聞』九号（一九二九年二月三日）、同一〇号（一九三〇年一月二八日）には、洋モス分会についての記事が掲載されている。
- \* 17 前掲『日本労働組合運動史』、六〇頁。
- \* 18 前掲帯刀ほか「私の女性史研究」、六六頁。
- \* 19 佐多稲子の五部作については、中沢福子「五部作論——プロレタリア作家としての成長」（『くれない』二五号、一九七一年二月）、矢澤美佐紀「佐多稲子における戦前の女性労働者の描かれ方——「女工」もの五部作」を視座に」（新・フェミニズム批評の会『昭和前期女性文学論』翰林書房、二〇一六年）、小林裕子「女工」もの五部作——走る、泣く、揺れる「女工」たち」（『佐多稲子——政治とジェンダーのはざままで』翰林書房、二〇二二年）などの研究がある。五部作のうち「幹部女工の涙」、「小幹部」では、争議を指導する組合同盟系の労働組合（友信会）の婦人部副部長であり、かつ全協とも接点のある古田ナカが二つの組織の間でジレンマに苛まれる様子が細やかに描かれている。
- \* 20 前掲帯刀ほか「私の女性史研究」。『ある遍歴の自叙伝』の本文中では非合法活動の経験について、ほとんど触れられていない。
- \* 21 中本は二巻一号（一九二九年一月）以降、『女人芸術』に、ほぼ毎号のように作品を発表している。帯刀貞代も『女人芸術』に頻繁に評論を発表している。
- \* 22 実刑判決を受けて三次刑務所で服役するまでの前半生については、中本たか子『わが生は苦悩に灼かれて——わが若き日の生きがい』（白石書店、一九七三年）を参照。戦後の平和運動との関わりについては、中本たか子『広島へ……そしてヒロシマへ——私の戦後平和運動史』（白石書店、一九八六年）を参照。
- \* 23 主な先行研究に、岡田孝子「戦時下における中本たか子の文学」（『帝京平成大学紀要』二三巻一号、二〇二二年三月）、渡邊千恵子「中本たか子（前衛）たらんとして——その密かなる抵抗「赤」・「鈴虫の雌」から「新しき情熱」へ」（新・フェミニズム批評の会編『昭和前期女性文学論』翰林書房、二〇一六年）、浅尾大輔「中本たか子の心の傷」前編（『民主文学』六七五号、二〇一七年一〇月）、

同後編(『民主文学』同六七六号、二〇一七年一月)などがある。マイク・モラスキー『新版 占領の記憶 記憶の占領——戦後沖繩・日本とアメリカ』(鈴木直子訳、岩波書店、二〇一八年)第五章には、小説「基地の女」についての詳しい考察がある。

\* 24 ①から⑦までは、『日本プロレタリア文学集』二巻「婦人作家集(二)」(新日本出版社、一九八七年)所収のテキストを用いる。同書では、①「恐慌」は『恐慌(プロレタリア前衛小説戯曲新選集)』(塩川書房、一九三〇年)、⑥「レポーター年枝」と⑦「再び工場へ」は「光くらく」(三二書房、一九四七年)を底本としている。②から⑤までは、収録時に著者による伏字の復元が行われている。

②「闘ひ」は、同書では「闘い」と表記されているが、本稿では初出、初収に従う。

\* 25 中本たか子のエッセイ「わが青春の不死なるもの——女子黨員受難記」(『知性』三巻七号、一九五六年六月)では、戦後に内山と再会したことが報告されている。

\* 26 帯刀は前掲「私の女性史研究」において、「三角関係がなければそんなところで塾なんか開かなかったと思いますけどね……(笑)」と発言している(一六九頁)。

\* 27 中本は自身の転向と岩尾の転向を差異化しているが、自身の転向を棚に上げて岩尾の転向のみを批判する姿勢はフェアではなからう。

\* 28 福永操は『あるおんな共産主義者の回想』(れんが書房、一九八六年)において、ハウスキーパーとして知り合った是枝恭二と結婚し、是枝の転向後に離婚した体験をふまえながら、ハウスキーパー制度について徹底した批判を展開している。

\* 29 中本は岩尾と別れた後、プロレタリア文学運動の指導的理論家であった蔵原惟人と結婚した。蔵原との結婚生活をフェミニズム的な観点から描いた中本の作品に、「壁にかかる画像」(『中央公論』一九五四年九月号)がある。

## 付記

引用の際、漢字は旧字から新字に改めた。  
本研究はJSPS科研費22K12636の助成を受けたものである。



